

東亞の地たるや廣裕にして、雄大、之を一望の下に把握する極めて至難事に屬するが、本書はよく、此の複雑多彩なる、世界最大の大陸と最大の海洋を包攝する廣域大東亞の性格のうちに、統一性を説き、本來皇國を中心に一體的關係を把持し、統一的構成を有するものであることを地理と歴史の綜合の上に、即ち時空一如の見地に於いて自然、民族、社會、政治、經濟、軍事等各方面より犀利精緻なる論考を加へられてゐるのである。

序の現代の歴史的な性格に於いては新しき中世の始まらんとする現代の性格を明確にまた熱情をもつて語られ、第一章東亞地政學の本質に於いては、世界觀と地理學より日本、支那、西洋政治地理學史を要領よく論述せられ最後にそれらの上に發展する東亞地政學の内容に説き及んでおられる。第二章世界新秩序の構圖に於いては東亞以外の世界各廣域圏の諸條件を比較検討せられ、遂ひに其等に類絶して最も優れたる廣域圏の大東亞たる所以を明にせられ、次章大東亞の自然、民族、社會に於いて夫々詳述せられる。第四章大東亞の軍事地理は著者の特に多年專攻せられる得意の地域たる支那に於ける軍事地理を詳細に論究せられたものであつて、過ぐる昭和十三年支那事變の始にあたり此の研究は特に序にも記されてゐる如く、適當なる方面に呈出せられ、端的に實踐的役割を果たしたことを記さねばならない。第五章大東亞の政治地理のうちには各地域別による銳利なる地政學的考察が行はれ、次章大東亞の經濟地理に於いては資源、國土計畫等最要なる課題の明確なる説明がなされてゐる。結語の大東亞並に世界の新秩序に於いて大東亞こそ世界の核心であり、東亞の新秩序は即ち全世界

界の新秩序をもたらす所以を説かれる。

まことに本書は、嚮に高く掲げられた小牧實繁教授の「日本地政學宣言」の理念にもとづく具體的な大東亞廣域の綜合的論究であつて、夥しき在來の東亞關係の平叙紹介地理書、或ひは翻譯地政學書の氾濫するうちに燦然として高く聳へるものである。

今日吾々に課せられたる光輝ある大東亞國建設の聖なる大事業に挺身するに當つて、最良の指導的東亞地政學の書として世のあらゆる識者に精讀を薦めるものである。(昭和十六年十月、生活社刊、二二六頁、定價二圓八十錢)(藤野義明)

印度支那(佛印、タイ、ビルマ)

——世界地理政治大系 第三卷——

室賀信 夫著

大東亞戰爭勃發以來、北方を忘失したのではないけれど、我々國民の注視は一樣に南方に向けられてゐる。南方圏は、それに對する我が國民の意識の昂揚と共に一般の深き關心を惹起せしめたのである。

本書は標題の示す如く、其等南方圏の中、佛印、タイ、ビルマ、英領マレーの四國を含む、所謂印度支那半島を取扱つたものである。自然はこの半島を幾何かの地域に分け乍ら、而も一の地域に統一せしむべき季節風、海流等の契機を附與してゐたのであるが、それを分割し、又相互の交渉を妨げたものは此所に強權支

配を樹立した白人に他ならなかつた。半島の不幸は白人の野望に起因してゐる。即ち英・佛等は此等の地域を黄金と技術の力に依つて自國への食料品、原料品供給地、又自國の工業生産品需要の市場たる植民地、搾取の對象地たらしめ、又南洋諸島、支那果ては日本進攻の據點たらしめたのである。げに此の半島こそは世界の寶庫が圍む所謂「亞細亞」地中海への門戸をなし、印度支那の領有なくしては大陸工作は不可能だつたのである。農業耕作や栽培に、鑛産資源の開發に、交通の現實に、或は住民の状態に如何に多くの歪曲面が形成されてゐる事か。誠に亞細亞あつての歐羅巴であり、歐羅巴の繁榮は踏みしだかれた亞細亞を基礎としてゐたのである。此等の歪曲を全面的に剔抉し、權力的な領有關係から印度支那を本來の面目に復歸せしめる事こそ、我等地政學者のそして日本人の任務であり、然かする事こそ曾つて此の地に華々しい活躍を遂げた我等の祖先の遺業に答へる事ではなからうか。況んや久しい白人の抑壓に苦しめられ、歪められ乍らも、此の半島諸國の貿易はその植民地性を裏切つて亞細亞殊に日本と深くも結ぶ所があり、その經濟的開發が白人の支配機構の下では一定の限界を定められ、その高度の開發は専ら亞細亞特に日本の手を俟たずしては開發し得られないにおやである。印度支那半島と日本との結合は、此の半島の持つ地域的發展の必然的過程であり、此所に我が南進政策が歴史地理の必然たる基礎があるのである。印度支那が新しい秩序に定められ得るか否かは、ただわれ／＼自身にかかつてゐる。

本書は此等の點を自然的基礎、住民の構成、歴史的背景、資源と經濟、列強の壓力と民族の反響、なる五章に分つて解説書的な形式の中に詳細に指示してくれ、此所に本書が、南方圈を單に現實を表面的にのみ把握し、或は重要資源地としてのみ理解し、甚だしきは單なる旅行記にすぎないと思はれる數多の類書を鏡くも抜いて高く光彩を放つてゐる所以がある。衷心より廣く江湖の人士に三讀を薦める次第である。本書が文部省推薦圖書に選ばれたのも誠に當然の事であり、本書に對する一の讃辭にすぎない。
〔昭和十六年十一月、白揚社發行、定價金二圓〕〔岡本記〕

龍門石窟の研究

（東方文化研究所）研究報告
第十六册

水野清一・長廣敏雄著

早く明治三十五年、洛陽伊闕を訪れて諸洞を紹介せられた伊東博士の業績以來、我々には既に親しいものとなり來つて居り、又東亞の魅力として世界に讃歎せられてゐる龍門の藝術は、それ自身又研究の歴史を重ねて來た。然し我々は未だこの龍門各洞について、單に之を事實的に知るのみならず、更に立入つて深く内容的にも検討した點に専門的研究として稱するに足る業績を持つて居たとはいふ難い。然るに昭和十一年、北支に美術の探査旅行を試みた著者等は、既に十二年その業績の一半を「寧夏山石窟」として公けにされたが、今また、その龍門に關する根本的研究を發表して此の缺を満することゝなつた。